



溝を掘った中に丸太柱（矢印）を立て、土で塗り込んで壁とする構造

ふるさと御所 文化財探訪

其の二十九

古墳時代〈17〉
葛城氏の盛衰
(6)

葛城氏と
南郷遺跡群①

生涯学習課 文化財係
☎内線696

写真1 南郷遺跡群の大壁建物
(転載許可：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)

葛城襲津彦は、日本書紀に引用された百濟記に沙至比跪とある人物と同一人物とみられ、実在を確実視できる最古の人物の一人とされている。日本書紀には神功皇后5年3月に新羅の草薙城を破って帰ったとの記事があり、また、この時連れ帰った捕虜が桑原、佐麻、高宮、忍海の四邑の漢人らの始祖であるとも記しています。このとき日本海を渡り倭に至ったのは、おそらくは捕虜ばかりではなく、好太王碑（先月号参照）に記す、朝鮮半島全域を舞台にした大規模な戦乱から逃れてきた人々も多かったことでしょう。そして、彼らには多くの技術者が含まれていたとみられています。

忍海については新撰姓氏録などの文献からも渡来系の人々が多く居住していたことが分かっていますが、一方で御所市多田・下茶屋・佐田・南郷の広域にわたって営まれ、佐麻の一角にも相当するとみられる南郷遺跡群においては、発掘調査の結果、韓式系土器といわれる特徴的な遺物が多量に出土したことに加え、日本列島では初期の事例に属するカマド付き竪穴式住居や大壁建物（写真1）という朝鮮半島由来の建物の存在によって、渡来人が多数居住していたことが判明しました。なお、南郷遺跡群は5世紀中葉に始まるので、右記の日本書紀の襲津彦の時期から微



写真2 南郷角田遺跡出土のガラス滓とガラス玉
(転載許可：奈良県立橿原考古学研究所)

妙に後のものとなります。おそらく葛城氏の次代の首長の事績が襲津彦のものとして伝えられたのでしょう。さて、南郷遺跡群のうち南郷角田遺跡ではガラス滓（かす）（写真2）や銀滴（写真3）、鉄滓や鍛造剥片、鹿角の破片など、それぞれの加工の痕跡となる遺物が多く出土しています。これは前記の経緯により渡来した人々が、当時の最先端技術である「高く大きな火力」を、鞆と羽口を用いて炉に送風することによって生みだし、それを駆使したハイテク工業が集約して行われたことを示しています。

そして驚くべきことに、そこで生産されたものに甲冑があることが判明しています。また、鉄と鹿角・ガラス玉・銀の組み合わせは、刀剣とその鞘や把の装飾を類推させます。



写真3 南郷角田遺跡出土の銀滴
(転載許可：奈良県立橿原考古学研究所)

鉄素材の確保および武器・武具の生産と管理は、当時のヤマト政権にとって生命線でした。それを葛城氏は自らの膝下で直接経営しているのです。このことは5世紀代における葛城氏の権勢の大きさを如実に示す事実といえるでしょう。

【参考文献】 奈良県立橿原考古学研究所『南郷遺跡群』I（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第69集、1996年）

（文責 藤田 和尊）



2011. 2